真宗概論 (三)

鈴木大拙

1

昨日申上げた名号ということですが、キリスト教の方でいうと、真宗の名号に対するものは、つまり、神がモーゼに、シナイの山で告げられた "I am that I am." または "I am the God who is." または単に "I am." というようなこと、これが名号になると思います。それはキリスト教的名号とでも申しましょうか。これに対して、仏教の方は、すでに申上げたように、無量寿でもよし、無量光でもよし、あるいは、無量寿如来、無量光如来、どちらにしてもかまいませんが、それを日本では、無量寿如来とか無量光如来といわずに、阿弥陀様とか弥陀如来とかというようになったということは、甚だ意義のあることだと思います。

そして、この阿弥陀如来の「如来」という字が、また、すこぶる意味のある言葉で面白いと思います。この如来の「如」という字は、真如などの如ですね。そして、如にして来り、如にして去る。これは、チベット語で如来というのは、如にして来るでなくして、如去である、如にして去るという方だ、と、こう聞いております。tathāgata の āgata を、アーガタと読むのかアガタと読むのか、私は詳わしく知りませんけれども、読み方を、長くするのと短くするので、去くことになり来ることになる、と、こういいますから、どっちでもいいのですが、如にして去来する、

如にして行ったり来たりする。

この、行ったり来たりするというのは、今、どういう字を使うのですか。私は、その方面のことは知りませんけれども英語にはbecomingという字があるですね。一方、存在的なことをbeingとして、そして、片一方の方をbecomingと、こうするというと、その如来 tathāgata ということは、単なる、being ということで、じっとした存在論的なものでなくして、いつも転変して限りなく変化するという意味にとって becoming というていいだろうと思います。becoming というのは、同じかたちを取るんじゃなくして、aがb、bがcになりdになるというあんばいで、aがaでないものに移り、それからまた、そうでないものに移り、また、そうでないものに移る、転々変化するという意味で becoming という。

それで、如にして来り如にして去るというと、being が becoming で、becoming が being である。being というものにとどまるというと停滞してしまって、ただ空ということになってしまうかも知れないが、その空というものが空にとどまるのじゃなくして、空にして去来する、空そのままにして行ったり来たりする。それで、如来という字は、よほど面白いと思うのです。

2

それで、阿弥陀如来という時に、無量劫で無量寿でも、どちらでもいいが、その阿弥陀が、如に去来するということになってくるというと、阿弥陀という言葉を大智にあてるというと、如来という言葉は、むしろ、大悲にあたる、と、こう見ていいですね。大智というと空に滞るような見方が出やすいですね。そうでなくして、動いておるという点からみるというと、大悲にあたって、そこから、大智と大悲のはたらきが出てくる、と、こういうあんばいに解いてみるというと、それが阿弥陀如来という名号になる。

その名号になるということが、よっぽど大事なので、私は、始め、名号になるということを単なる名だと思うておった。この眼の前にある声を大きくする拡声器――、これに拡声器という名をつけるとすると、その名と、それから、そのものとを、二つに分けてしまうようになるですね。それから、その人の名を、かりに七兵衛というならば、その七兵衛という名と、七兵衛の名がついておるところの人間と別になってしまう。二つになってくるというと、七兵衛というのが、その人自身でなくなってしまうですね。

そういう名号じゃなくして、仏教の方でいうところの名号は、名号が即ち七兵衛。それが当り前なんだけれども、そうでなくて、どうも分けて考えるようになるですね。分けてしまうというのは便利なんで、例えば、数を研究する場合に、二つのリンゴとか三つの梨というあんばいに分けて考える。二つ三つというものは何もない。二つのリンゴや三つの梨はあるけれども、二つ三つというものはない、と、そういうふうに数字を離して考えるというと、また、その方での名号になるわけなんですね。数学の数字というものは、リンゴとか梨とかを離れてしまって、その数だけを実物として問題にする時に、数学というものが出来てくるので、リンゴや梨や人間や猫や犬などはかまわないで、数だけが成立つということになるんだが、実際の場合に於いては、そういう数というものではなくして、三つのリンゴ三人の人間というようなあんばいに、何か後について出てくるですね。

ところが、数学の方じゃ、その後についてくることのない数だけを問題にする。そういうふうに、数学の場合じゃなくして、普通の場合に使うべきようにするのが、所謂、名号である。単に、使うというのじゃない、使うべきようにするのが名号である。

だから、阿弥陀如来という名を単に称えるのじゃなくして、名そのものになるんだ、と。名そのものになるというのも甚だ不十分だが、名を称えるということは、その名を生きて行くということの意味になるんですね。だから称名というのは、口で「ナ・ム・ア・ミ・ダ・仏」と六字を称えるということじゃなくして、六字の名号なるものが、こ

の普通にいうところの身心をもつところの人間にはたらく。ぴちぴちと動いていく、それが南無阿弥陀仏を称えることである、と、こうなる。

だから、南無阿弥陀仏は、ただ口称の南無阿弥陀仏でなしに、生命（いのち）の南無阿弥陀仏というか、南無阿弥陀仏が生命そのものになる、それが、真宗仏教に於けるところの称名念仏である、と、こういうふうになるというと、名号が即ち実体で、実体が即ち名号である。そういうと、何か、そんなおかしな阿弥陀様があるか。名号というと、ただローマ字で綴ったか仮名で書いたところの音そのものに過ぎないのか、と、こういうふうな質問が普通出るに決っておる。で、それで迷う。それで迷うけれども、その実、そうでなくして、その「南・無・阿・弥・陀・仏」ということそのものが阿弥陀様なんですね。それがわかるようになるというのが宗教――。宗教がそこにある。

3

それで、私は、よくいうんだが、庄松や、それから浅原才一というような妙好人。ほかにも沢山あるに相違ないが私のいくらか知っておるのは、二三人にすぎないのですけれども、その人のいう南無阿弥陀仏は、そういう言葉を称えるんじゃなくして、それになって出るんですね。それから、これは一遍上人の話だが、一遍上人が、誰か禅宗の坊さんに参禅して、そうして、南無阿弥陀仏の公案があった。そうすると、一遍上人が、自分の領解を先生に申出た時に、「どうだ」と先生がいわれたらば、「となふれば仏も吾もなかりけり、ただ念仏の声のみぞして」と、こういうた。そうしたら、先生は「まだ駄目だ」と、こういわれたところが、次にこういうことになったというですね。「となふれば仏も吾もなかりけり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と。

「南無阿弥陀仏の声のみぞして」というと本当のものじゃないんですね。それで「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」というて、それに対して註釈も加えなければ、言い訳もしないというところに、南無阿弥陀仏そのものが出ておるで

すね。それを、人(にん)が出てはたらいておる、と、こういう。

これを禅宗的ないい方をすると、こういう禅宗の偈があるですね。それは「心は万境に随って転じ――」。赤いものの見れば赤、黒いもの見れば黒、と。そして「転処実(まこと)によく幽なり」。この幽という字が書いてあるのが面白いですね。「流れに随って性を認得すれば、喜びも無く、復憂えも無し」。

だから、流れに随って becoming で、転変していく、その流るる儘に性を認得する。性は名号ですね。流るる儘に名号を認得すれば、つまり、名即実、実即名。「名は実の賓なり」という賓でなくして、実そのものですね。名即実、実即名、というものを、そこに把握すれば、認得すれば、喜びもなし、また憂えもなし。これが間違いのもとになる。喜びもなし憂えもなしというたら、もういけない。そうでなしに、喜びもあり、また憂えもあり、と。こういう方がいい。

それで、それに、もう一つ足して――、「流れに随うて性を認得すれば、喜びもなし、また憂えもなし」と、こういうが、そこに一句加えて「喜びもあり、また悲しみもあり」というと、それ全体が生きてくる。だから、名号というものは、じっとしていない。名号には、喜びもなし憂いもなし、じゃなくして、喜びもあり、また憂いもあり。朝から晩まで、ただ喜びもなし悲しみもなしと、一本の棒のようになっておるという意味じゃない。

ところで、こういうことがある。真宗の方じゃ、あまりいわんようだが、禅宗では、殊に文字に執われるなというですね。言語文字に執われない。教外別伝とか不立文字というようなことをいうが、言葉に執えられるなということですね。だから、名号などという時にも、名号の音に執えられるな、名号そのものになれ、ということですね。この名号そのものになれ、ということも、一つの方便にすぎぬのであって、名号そのものになれも、ならぬもなくて、名号が、スーッと出てこなければ、名号即実ということにならない。

だから、阿弥陀という名号の他に、後光を放っておるところの仏様が出るんじゃなくて、名号そのものが後光を放

って永遠に生きておる。名号というものが、そういうふうにとられなくちゃならん、と、こう私はいいたい。

4

それで、こういう話があるですね。これは、禅宗の人がいうので、真宗の方にはあてはまらぬように考えられるかも知れんけれども、私は、そうじゃなくして、仏教というものは禅宗も真宗もなし、その器根によって受け容れるものが、ああにもなり、こうにもなる、と思うておっていい。それで、面白いと思うのは、昔、宋時代にですね。鎌倉時代に道元禅師が行かれた一寸前頃になると思うが、その頃、圜悟という人があった。あの『碧巌録』の評唱や下語をした人ですが、その人の師匠に五祖の法演という人がいた。宋時代には、お役人というか官吏というか、そういう人が参禅をしたものらしいが、その中の一人に提刑というのだから、何か司法に関係した人、大臣じゃないと思われますが、まあ、司法に関係した人が五祖の法演禅師のところへ来て「私は、これから地方へ出かけるので、お師匠様にお目にかかれる機会も少いと思いますが、何か禅宗を勉強するのに当って、参考になることを承りたい」というた。その頃は、今日本でやるように、公案というものが未だ出来ていない頃で、その頃から追い追いに出来てきたと思いますが、そうするというと、五祖法演の曰く。「若い男女のロマンスを書いた小艶詩というものがあるが、あなたは、それを知っておるか」と。まあ、流行歌のようなものであったか知れませんが、そうすると、それは知っておると答えたのか、知らぬと答えたのか忘れましたが、五祖の曰く

「頻りに小玉（しょうぎょく）を呼ぶも元事（もとごと）無し。祇（ただ）、檀郎の声を認得することを要す」。小玉というのは、小間使いですね。これを若い女とみてですね、自分の側に仕えている小さい女の子を、しきりに呼ぶけれども、別に用というものはないんだ。その目的は、自分の好きな檀郎、つまり好きな男に自分の声を認得させるがために、しきりに小さな子供を用もないのに呼んでおるんだ、と。「こういう詩があるが知っておるか」と。その声というのが大事なんですね。何か

いうて呼んでおる。用もないのに呼んでおる。

その声を、地方へ行くという官吏に、「お前、聞いたかどうか」と。そういうことがあって、それから、圜悟という男が昼から法演禅師のところへ出てきた。「今朝、だれそれがお別れにきて、その時に、お話があったと聞きますが、その時のことを私も聞きたいが――」と。そうすると禅師は、「それはこうだ」と、今いうように、もとより何の用もないのに、しきりに小玉を呼ぶのは、ただ檀郎に、その声を認得させたいからだ――と。

「その声を聞いたか」と、五祖が圜悟にいわれたらば、圜悟が暫く蔭へ行っておって「わかった」といった。すると五祖が「お前、声を聞いたんじゃなかろうが」というた。ここが大事。声というのは名号ですね。名号を、ただ音として、六つの字の重ったものとして受け容れたかどうか。また、その名号を生きたものとして受け容れたか、どうか。声を聞いたというが、その声は何々という声でなくして、声を聞いた主が誰だということがわからぬと駄目なんですね。それを指しておるんだが、五祖が「聞いたか、どうか」というたらば、圜悟が「わかった」といい乍ら、返事をしないで立って表に出た、という話がある。

表へ出て、何となしに天地をみておった、というか、何となしに表へ出ておったらば、そこに鶏がおって「ケケココー」と啼いた。その「ケケココー」が馬鹿に大きかったのか、圜悟が、それを聞いてさとった。「それだ」と、大いにさとった。はじめ聞かれた時に「わかった」というたが、はっきりわかったというのではなかった。ところが、鶏の啼くのを聞いて、はっきりわかった、と、こう話が出ておる。

その話を読んでおった時に、その声が名号だ、と。名号を、音の連続として、あるものを象徴しておる人間の言葉の六つ続いてあるものだとすれば、もう、遠し遠しですね。そうでなしに、名号というものが、生きたものとして、受け取られた、といえばもういけない。名号が生きたものとなって、自分の心の中へ出て来た――と、こういう方がいいかも知れん。即ち、自分が名号になったということ。ただ名号になっただけじゃない、自分が名号だということ

になる。そこに、何か、一つの自覚が出る。その経験を、私は、横超といいたい。

5

同じ次元の、同じ面のところへ行くのじゃなしに、次元の違ったところへ飛び上るというてもよし、飛び下るでもなし、飛び移るでもいいが、それが真直ぐに同じ平面を行くのでなしに、違った面へわたりがつくというのが横超である。それから、竪超というのは、今いうように、音を聞くということになるんだが、音を聞くというよりも、音に生きてきたというか、音そのものが自分になったというのが横超。

だから、そこに止っておるのではない。違った面へ移るインスタント instant を横超という。それを空間的にいえばリープ leap という。時間的には、モメント moment でもインスタント instant でもいい。それは、時間をこまかく切った――というものでなしに、そこに永遠そのものを生きて行く、ということになる。それが、名号の実体である。名号を実際に体験して行くところが、それである。

そうするというと、鶏が「ケケココー」と啼いた、その「ケケココー」が南無阿弥陀仏である。そして、聞いた自分が南無阿弥陀仏になった、と、こうすると、何もかも、あれもこれも南無阿弥陀仏となって、ある意味で、汎神論的な臭みがあるんじゃないか、ということになるかも知れん。仏教が、よく、パンティズム Pantheism じゃないかといわれるが、そういうようなものでないかと哲学の人がいうかも知れんが、そうではないですね。仏教はパンティーステイック・ミスティシズム Pantheistic mysticism じゃなくして、仏教には仏教自身の特別な境界があるということを知らなければならぬ。

それで、一寸思い出したが、蘇東坡の詩にこういうのがある。これも宋時代だが、これは、「谿声便是広長舌　山色豈非清浄身　夜来八万四千偈　佗日如何挙似人」。

「夜来八万四千偈」というのは、つまり、お経に書いてあること、すべてのこと、という意味ですね。八万四千のお経に書き連ねているところの色々の有難いこと。それが、山の色も渓の流れも、みんな仏の声である、と。

これが『大無量寿経』にせよ『阿弥陀経』にせよ、極楽の形容に、それが出ておる。極楽へ行けば、迦陵頻伽の声が聞える。迦陵頻伽は、みんな三宝の徳を讃えておる。それから、池に出るところの蓮の花からも、有難い阿弥陀様の香が出ておる。また光が出ておる。何もかも、仏の広長舌ということになって、八万四千どころじゃない、無量無数の有難い偈が、そこから出ておる、というあんばいで、もう極楽全体がそれですね。それをひっくるめて南無阿弥陀仏ということにしてしまっても差支えない。

6

極楽は名号そのものである、というのを、何もパンティースティック Pantheistic に解するんじゃないんですね。声は声であって――、猫の声は「ニャム」であり、犬の声は「ワン」であって、そして、狼の声は「オー」蟬の声は「ジュー」であって、その儘、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ですね。そうするというと、みんな南無阿弥陀仏で、一つになったというわけじゃないので、猫は猫、犬は犬、私は私、人は人、花は紅、柳は緑。喜びもあれば憂いもある。そこにパンティースティック Pantheistic な一面があるといえばあるが、それと同時に、何もかもが違っている。色々に違って、千差万別の中に、一があり、一の中に千差万別がある。一即多、多即一。それはパンティーズム Pantheism とは大分違う。

それから、マホメット教の方では、神の名をアラーというですね。このアラーというのは I am. という意味だと聞いたことがある。それで、神がモーゼに、「あなたの名は?」といわれた時に、神の曰く、“I am that I am.”この I am. という言葉が名号ですね。私は、よくドイツのマイスター・エックハルトの言葉を思い出すんですが、その人

の使っておる言葉の中に“istikeit”というのがあったと思うが、これを英語でいうと、Is-ness ですね。「あること」being という字がそれにあてはまるわけだが、その being という字は、今では一定の意味がついておるので、Is-ness とは区別して考えなけりゃならん。この Is-ness という言葉を使うと、いかにも野蛮的なようになってしまうんだがこの Is-ness という言葉は、よっぽど面白い。

それで、南無阿弥陀仏は、Is-ness I am. も Is-ness アラーも I am. それから、極楽で迦陵頻伽の声がするというのも、池に水が流れる音がするのも、みんな Is-ness をうたっておる。Is-ness そのものである。この Is-ness というところに自覚が開けてこぬというと駄目だが、そこに停ってしまうと、本当の仏教というものでなくなる。そこに往相廻向というものを、一区切りつけてよかろうと思うですね。

今申したように名号を解するというと、「往相には大行あり大信あり」と『教行信証』に書いてあるが、この大行ということがわかる。私のいうように名号を解するというと「行巻」の大行ということがわかる。南無阿弥陀仏を称えるということに徳が具わるということが、どうもわからなかったが、いまいうように、南無阿弥陀仏は音の連続ということでなしに、仏そのものであるということになると、万徳円満もわかる。

7

それで、大行と大信ということが往相ですね。そして、還相に出てこぬといかぬのだが、それが、行信証の証に当る。証は還相の生活である。還相的生活である。それで、大行と大信は往相的生活である。この還相というのは自分だけ助かるのじゃなしに、自分から出て、他のためにはたらく。よく禅宗の坊さんが為人度生というが、為人度生などと人のためにといわないで――だな。そういうことにこだわっておっては面倒になる。そういう自覚は持たねばならぬが、そういう自覚にくっついて廻っておって、私がこうするのは還相廻向で、これは他のためにやるんだ、これ

が、仏教を実行に移すことだ――などということなしに出来ないといかん。

そこに私は、unconscious ということの意味が出てくると思いますが、この unconscious ということが神通無導といいますか、あるいは自在無導。菩薩の還相的行動というものは、阿修羅の琴の音曲自然なるが如し。琴の弾き手が誰もいないのに、音曲が自ら出る。そういうことが、曇鸞の『浄土論註』に出ておるのを、親鸞聖人は、その儘ずっと引いておられるですね。

それで、菩薩の行為というものは、いまいうようなあんばいで、遊戯自在的なものでなければならぬ。クリアティヴィティ creativity の生活でなければならぬ。クリアティヴィティ creativity というと、手を右から左へ動かすような場合、それをただ見ているというと、右から左へ手はどれだけの距離を動いたとか、どう動いたと、か、とそういうことを見るようになるが、そういうことに拘わりなく、それを内面的に見るというと、私の手は左右の限界以上には動かぬ、もうこれ以上は上がらぬ――という、その上がらぬところに、自由な、私のクリアテイーヴ creative なものがある。

そうなるというと、遊戯自在ということが、限られておって、自在でなくして、そうして、自由自在なものがある。そうなるというと、菩薩の生涯というものは、無功用、無功徳になる。無功徳であるが、すこぶる功徳限りないものになる。無功徳のところに万徳円満、功徳円満。不自由なところに自由がある。そこに詩 poetry がある。

8

あの、四五年前にノーベル賞をもらったフランスの詩人が、賞を受けた時にいったという言葉の中に「近代人の短所は、有限の時間と無限の時間との間に、十分の関係がついていない」というですね。有限と無限とが離れてしまって、その間に、円満な融通無導の交渉がついていないのが、近代人の欠点であると、こういったということを読んだ

ことがある。それが甚だ面白いと思います。

これを、昔から「赤子の心になれ」とか「大人は、赤子の心を失わず」とか、また、キリスト教では「天国へは子供のようにならねば行けぬ」とか、というようなことですね。というても、無茶苦茶なことをやる子供のように、大人が子供の真似をせよということじゃない。そういう意味じゃないですね。子供の境界から大人の分別を通って、そうして、また子供の境界へ帰る、と、この通ったという経験が生きてこなければ人間にはならぬですね。段々理窟をいうて、子供の境界を離れて来て、三十年、四十年、五十年を経過して、そうして子供になる、という時の子供は、いま生まれて来た子供が「ぎゃー、ぎゃー」いうのとは違う。それにならぬというと、人間の本当のマチュリティーmaturity——人間が本当の人間に出来上ったとはいわれない。そういうことになるのが還相的生活のぎりぎりのところ、最も大事なところになるというてよかろうと思うです。

これも、やはり五六年前だったか、あるいは七八年前だったか、アメリカの「ニューヨーク・タイムス」の中に出ておったベストセラーの一つに、こういうのがあった。それは子供の話なんですね。子供が朝から遊びに出ておって、昼ごろ、おなかがすいたから帰ってきた時に、親が「お前、どこへ出ておった」というたらば「外へ出ておった」と。「何をしておった」というと「何もしない」と。それが面白い。本の題は「外へ出ておった」だったか、「何もしない」だったか。とにかく「外へ出ておったが、何もしない」と。ところが、そうじゃなくて、実際は、あらゆる意味の子供的活動をやっておったにきまっとる。飛んだり跳ねたりして、それで、おなかがすいたから帰ってきたわけなんです。それが面白い。何をやっておっても、何もやらぬのと同じことなんですね。子供からいえば——飛んだり跳ねたりは大活動に違いないが、子供の生活からみれば、それは大変でも何でもない。Nothingなんですね。それが遊戯自在。

それなら、我々の人生は、ただ遊び半分に暮すのか、と、こういう人があるかも知らぬが、そういえば、もう間違

いなんだな。そういう人こそ地獄へ堕ちること矢の如し、というか、一番先きに堕ちる、と、こういうていい。そういうのでなくて、遊戯自在――。『教行信証』を読むと、そういうことが書いてある。私は、親鸞聖人が居られるというと、大いにそれを話してみたいと思うですね。――が、少し時代が過ぎてしまったな。

それでは、また機会があったら申上げるとしてですね。まあ、今回は、これで失礼いたします。

註① 心随万境転　転処実能幽　随流認得性　無喜復無愛（景徳伝灯録巻第二・大正蔵第五十一巻史伝部三）

② 祖曰。提刑少年曾読小艶詩否。有両句頗相近。頻呼小玉元無事。秪要檀郎認得声。（続伝灯録巻第二十五・大正蔵第五十一巻史伝部三）（本稿は、さる昭和三十八年六月十日より大谷大学において開講された特別公開講座の第三日目の講話の筆録である。文責　伊東慈明）

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。